# 種生物学会ニュースレター

The Society for the Study of Species Biology Newsletter No. 55



会長就任のご挨拶　1　/　第 54 回 種生物学シンポジウム（つくば）のご案内　2
第 53 回 種生物学シンポジウム（東北）の記録　6　/　役員選挙の開票結果　9
事務局からのお知らせ　9　/　会計報告　10


## 会長就任のご挨拶

西脇　亜也

本年 2022 年 1 月から、新たに種生物学会会長に就任いたしました宮崎大学の西脇亜也です。現在、工藤 洋さん（副会長）、水口亜樹さん（庶務幹事）、下野嘉子さん（会計幹事）ほか、選挙で選ばれた 14 名の幹事と、監査委員の柿嶋 聡さんと富松 裕さん、英文誌編集委員長の大原 雅さん、和文誌編集委員長の山尾 僚さん、学会賞選考委員長の川北 篤さん、渉外担当の奥山雄大さんと藤井伸二さん、男女共同参画担当の堂囿いくみさんと新田 梢さんらと学会運営にあたっています。大原編集委員長は 2022 年度末まで務められる予定で、その後、三宅副編集委員長に引き継がれる見込みです。

また、2021 年末までは、陶山佳久さんが会長、富松 裕さんが庶務幹事、堂囿いくみさんに会計幹事をお務めいただきました。本当にありがとうございました。以上の皆さんと共に、種生物学会と会員の皆さんの研究の発展のために頑張って参りますので、よろしくお願い申し上げます。

種生物学会は、学会として正式に発足したのは 1980 年ですが、前身となる実験分類学シンポジウムは 1968 年から開催されました。当時の若手研究者たちが、分野を越えて集まり分類学を新しい観点から見直し、発展させようという大変野心的な勉強会だったそうです。呼びかけ人の一人である河野昭一先生によると、参加者は「赤城山の反乱」と称していたそうで、既成の学問分野に対する強烈な問題提起を意図していたとのことです。このシンポジウムは、種生物学シンポジウムと名前を変えましたが、分野を越えて新しい観点から見直し、発展させようという精神は今も受け継がれていると思います。

私が種生物学シンポジウムに初めて参加したのは、1987 年（第 18 回）の福井県あわら温泉でのシンポジウムでした。その時は、「動物による種子分布」と「テンナンショウの生物学」に関するシンポジウムが企画されました。大学院生であった私には、未知の内容に関する激しい議論を理解することが難しかったのですが、何かとても面白くて熱い議論がなされていると感じました。シンポジウム会場はスライド上映のために暗くてわからなかったのですが、夕食会場を見渡した際、浴衣姿の参加者のほとんどが学生などの若い人たちだったことに大変驚きました。さらに驚いたことには、これらの若い人たちがベテランの研究者達に臆することなく議論をふっかけていました。また、気がついてみると、酒宴の中で自分達のデータやプレゼンの印刷物をお互いに見ながら意見交換をしている輪がいくつもできていました。いつしか、私もその輪に加わってやりとりを聞いてみると、シンポジウムで話題になっていた理論や手法・技法などについても情報交換されていて、とても刺激的な時間でした。

1987 年は、種生物学研究会が種生物学会に変わった年でした。総会では学会になると、既成の学会のように、組織維持のための労力が大きくなることや、堅苦しくなることへの懸念が議論されたと記憶しています。そのような学会にはしないことを目指そうと言うことになり、とても民主的な集まりだと思いました。

この 2 年後の 1989 年（第 20 回）は蔵王ハイツで開催されましたが、この年は私もスタッフの一員としてシンポジウムの運営に関わりました。「生物間相互作用と進化」、「種とはなにか？」と言うとても刺激的なシンポジウムが企画されました。
その後、1992 年（第 22 回）の浅間温泉では、「進化生態学の論理と展開 : さようなら種生物」で私も「繁殖戦略としての受粉様式 ： 風媒花と動物媒花における受粉と結実」として話題提供させていただきましたが、この時は「さようなら種生物」と言うサブタイトルのためか、はたまた「種は実在しない」と主張された演者のためか、河野先生ら重鎮の先生方から激しい批判を受けました。総合討論は、さながら学生運動の時代に戻ったかのような大激論でした。どうやら、今度は私たちが「反乱軍」になったようですが、まあ、これも種生物学会らしいできごとですし、その後の進化生態学に関する理解が進む良い機会になったと思います。

大激論といえば、再び蔵王ハイツで開催された 1998 年 2 月（第 29 回）のシンポジウムの時の、和文誌「種生物研究」に関する議論を思い出します。川窪和文誌編集委員長が、「書き手にも読み手にもメリットが無い和文誌は廃刊すべき」と主張し、激しい議論の末に、和文誌を単行本として毎年発刊すると言う、かなり無謀とも思える方式に移行すること

になりました。ちょうどこの時、シンポジウムの一つが「繁殖生物学の新しい潮流」で、このシンポジウムを聞いた川窪編集委員長が、この内容を単行本にしたいと考えました。そして、1998 年 12 月（第 30 回）の鹿児島大でのシンポジウムの際の「送粉生物学の新展開」の一部も含めて「花生態学の最前線 美しさの進化的背景を探る」が単行本化の最初の本として 1999 年 11 月に発刊されました。2 冊目は、同じく鹿児島大でのシンポジウムの際の「森林植物の繁殖構造と集団分化：分子マーカーの有効性と限界」の内容で「森の分子生態学―遺伝子が語る森林のすがた」として 2001 年 2 月に発刊されました。その後も和文誌編集委員会が企画したシンポジウムの内容が次々と文一総合出版から発刊されて、種生物学だけでなく多くの周辺分野に影響を与え続けていると思います。

一方、2015 年頃には種生物学会は財政的に存続の危機に立たされていました。その状況は深刻で、種生物学会の解散や英文誌を廃刊する可能性すらありました。ところが、奇跡的な変革があり、2018 年度から当面の経済的問題がほぼ解消しました。これは、学会としての支出の大部分を占めていた英文誌発行の経費負担がほぼゼロになったことによります。すなわち、種生物学会英文誌である Plant Species Biology（PSB）を、日本生態学会の Ecological Research 誌、個体群生態学会の Population Ecology 誌とともに、3 誌一括で Wiley 社と新たな出版契約を結んだことによるものです。これは、国際誌としての PSB 誌の評価を直接反映しているものでもあり、これまの PSB 誌を育てていただいた皆さまの努力の賜物であると言えます。その結果、学会費の減額が実現しました。

現在、生態学会出版担当理事であり、種生物学会の幹事でもある久米 篤さんから PSB 誌の今後についてのご提案（オープンアクセス誌化の科研費申請）をいただいています。幹事会メール会議ではご承認いただきましたが、12 月の総会でも会員の皆様にご説明したいと思います。

数代前の会長の時代から、今後の種生物学会のあり方について学会員のみなさまと議論を続けています。簡単には答えは出ませんが、まず取組んでいるのが、シンポジウムをより充実させ、より多くの学会員にご参加いただくこと、そして参加された非会員の方には新たに会員になっていただく機会になるようにと考えています。

種生物学シンポジウムでは、これまで長年にわたり合宿形式で実施しており、参加者が夜通し研究の議論、交流を行える希有な学会となっています。また、企画シンポジウム以外にも、会員のポスター発表を実施しています。2020 年（第 52 回）、2021 年（第 53 回）はやむなくオンライン開催なりましたが、シンポジウムもポスター発表もとても活発に実施されました。本ニュースレターでご案内いたしますように、今年の第 54 回のシンポジウム（つくば）でも魅力的なプログラムが企画されていますので、是非ともご参加ください。ポスター発表はオンライン開催ですが、シンポジウムは 3 年ぶりに対面で実施されます。

会長として、より魅力ある学会となるようにこれからも努力して参りますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

## 第５４回種生物学シンポジウムのご案内
## （オンサイト/オンラインハイブリッド・つくば）

https://sites.google.com/view/sssb54symposium/

第 54 回となる本年度の種生物学シンポジウムは、新型コロナウイルス感染症をめぐる見通しが依然として不透明であることから、ポスター発表をオンライン、基調講演ならびに企画シンポジウムをオンサイト（オンライン配信あり）で行うハイブリッド形式で開催したいと考えております。開催地は、茨城県つくば市、国立科学博物館筑波地区（茨城県つくば市天久保４−１−１）を予定しています。なお合宿形式ではないので各自宿泊地を確保していただく必要はありますが、昨年に引き続き参加費は無料とします。学会員の方は、本ニュースレターの案内に従って参加申し込みをしていただければ、どなたも無料で参加およびポスター発表が可能です。

**申込み締切は 11 月４日（金）です**

**※ ポスター発表要旨の登録は 11 月 14 日（月）**
**※ 当日参加は受け付けませんので、ご注意ください**

なお、いくつか例年と大きく異なる点があります。まず、シンポジウム本体は基本的に公開とし、オン

サイトでは会場の収容量の関係から会員優先としますが、オンライン配信はどなたでも聴講できるようにする予定です。２点目として、ポスター発表を、シンポジウム本体の１週間前の 11 月 26 日（土）に開催し、その内容紹介として翌週（12 月 3-4 日）の本日程ではポスターフラッシュを行います。そのため、ポスター各賞は、シンポジウムまでに決定されることになります。３点目として、企画シンポジウムの内容を深めるため、今回はシンポジウムのテーマは和文誌企画１本となります。なお、昨年は実施しなかったプレシンポジウムについては、今回は基調講演という形で実施予定で、京都大学農学研究科の寺内良平さんに、病原菌との共進化などの作物進化の最先端の話題についてご紹介いただける予定です。

今回のシンポジウムのメインテーマは、「多種共存の生態学」です。「なぜ複数の植物種が共存できるのか？」という古くて新しい問題について、理論研究から実証研究まで幅広く紹介し、議論を深めます。

本来、合宿形式での親密な交流を大前提としてきた種生物学シンポジウムとしては、まだ例年通りとは言えない状況ではありますが、３年ぶりとなる対面での開催で、種生物学会らしい白熱した議論の場とできるようにしたいと考えております。みなさま奮ってご参加いただきますよう、よろしくお願いいたします。

● 開催方法

オンサイト開催:

委員会、基調講演、ポスターフラッシュ、シンポジウム、授賞式、受賞講演、筑波実験植物園ツアー

オンライン配信：

基調講演、ポスターフラッシュ、シンポジウム、受賞講演

LINC Biz:

ポスター発表コアタイム

※開催方法については今後、一部変更する可能性があります。

● **全体のスケジュール**

（変更になる場合があります。最新の情報は参加者へ電子メールによりお知らせします）

11 月 26 日（土）

| | |
|---|---|
| 8:45- 9:00 | 全体説明 |
| 9:00-10:30 | ポスター発表（コアタイム奇数） LINC Biz |
| 10:30-11:00 | 休憩 |
| 11:00-12:30 | ポスター発表（コアタイム偶数） LINC Biz |

12 月 2 日（金）

| | |
|---|---|
| 13:00-18:00 | 各種委員会 |

12 月 3 日（土）

| | |
|---|---|
| 9:00-10:30 | ポスターフラッシュ |
| 10:30-11:30 | ポスター受賞者発表 |
| 11:30-12:30 | 片岡奨励賞講演 |
| 12:30-13:30 | 休憩 |
| 13:30-15:00 | 総会・授賞式 |
| 15:00-16:30 | 基調講演「Genetics, Recombination, Disease and Evolution」寺内良平（京都大学） |
| 16:30-17:30 | 和文誌編集委員会企画シンポジウム「多種共存の生態学：植物の多様な共存機構を探る」企画者：勝原光希（岡山大学）・篠原直登（東北大学）・松本哲也（岡山大学） |

12 月 4 日（日）

| | |
|---|---|
| 9:00-11:30 | 和文誌編集委員会企画シンポジウム（続き） |
| 11:30-14:00 | 昼食・筑波実験植物園ツアー |
| 14:00-16:00 | 和文誌編集委員会企画シンポジウム（続き） |

## ● 和文誌編集委員会企画シンポジウム「多種共存の生態学：植物の多様な共存機構を探る」

12 月 3, 4 日（土・日）　企画者：勝原光希（岡山大学）・篠原直登（東北大学）・松本哲也（岡山大学）

フィールド系研究者にとって、さまざまな植物種が野外で混生する状況はごく日常的な風景といえる。しかしこのような「多種共存」は、必ずしも理論的に自明な現象ではなく、今なお、さまざまな視点から研究が進められている一大テーマである。近年、長い研究史のなかで列挙されてきた多くの仮説を統合した理論的枠組みが形成されつつあるものの、野外の植物群集が示す種間相互作用はあまりに多様であるため、いまだ充分に現実を説明するには至っていない。言い換えれば、これまでの理論研究では考慮されてこなかったような興味深い共存の仕組みが、フィールド系研究者が得意とする丹念な野外観察から新たに見出される可能性は高い。しかしながら、多種共存にまつわる理論的枠組みは、フィールド系研究者の目にはあまりに抽象的で難解に映ることも少なくないだろう。そこで本シンポジウムでは、実証研究と理論研究の隔たりを埋めることを目的として、さまざまな生態系、相互作用、進化的タイムスケールに注目した具体的事例を、野外での実証研究を中心として紹介する。さらに，それらが既存の理論的枠組みのどこに位置づけられるか(あるいは，いまだ考慮されていないのか) を整理し、野外観察を起点とした「多種共存」への今までにないアプローチの足掛かりとすることを目指したい。

12/3(土)

16:45-17:05　趣旨説明

17:10-17:45 「多種共存の前提条件としての生殖的隔離」
松本哲也（岡山大学）

12/4(日)

9:00- 9:35 「植物の形質多様性を規定するトレードオフと多種共存機構」
小野田雄介（京都大学）

9:40-10:15 「乾燥地における種間作用：匍匐性灌木の被覆が下層植生に与える影響」
三木直子（岡山大学）

10:25-11:00 「温帯林の樹木群集における多種共存研究：
植物土壌フィードバック実験から長期生態系観測まで」
門脇浩明（京都大学）

11:05-11:40 「先行自家受粉の進化が送粉者を介した繁殖干渉下の共存を促進する」
勝原光希（岡山大学）

11:40-14:00 昼食・筑波実験植物園ツアー

14:00-14:35 「共存理論で何をどうやってテストするか」
篠原直登（東北大学）

14:40-15:20　コメント
矢原徹一（九州オープンユニバーシティ）
山道真人（クイーンズランド大学）

15:25-16:00　総合討論

● 参加・ポスター発表申し込み【11 月 4 日（金）まで】

参加申込みフォーム（https://forms.gle/xXQppZ5pxEfw8M1U6）からお申し込みください。

- 今回のシンポジウムは、どなたでも聴講いただけますが、ポスター発表は種生物学会員に限って受け付けます。またオンサイトでの参加は会員を優先しますので、万一会場定員に達した場合は非会員の方にはオンラインでの聴講をお願いする場合があります。参加費は無料です。
- ポスター発表を希望する方は、参加申し込みフォームで「ポスター発表を申し込む」にチェックをしてください。ポスター発表の申込者（発表者）は、2022 年度分の種生物学会会費を納入済の会員に限ります。
- 非会員の方でポスター発表を希望の方は、事前に種生物学会への入会をお済ませください。入会手続きは、種生物学会ホームページから行うことができます。ホームページの入会案内にしたがって、今年度分の会費（一般会員 6,000 円／学生会員 3,000 円）を 11 月 4 日（金）までにお振り込みください。会費の振り込みが確認できない場合は、発表申込みをキャンセルさせていただきます。
- ポスター発表が優れていた発表者（学生会員のみ）には、「種生物学会ポスター賞」および「河野昭一ポスター賞」を授与しています。「河野昭一ポスター賞」は、発表者を学部学生および修士課程の大学院生に限定したポスター賞です。
- シンポジウムへのオンサイトでの当日参加は出来ませんが、オンラインでの聴講に限り可能とする予定です。ただし、極力締め切りまでに参加登録をしていただけますようお願いします。

● ポスター発表要旨の登録【11 月 14 日（月）まで】

- 発表要旨は、テンプレートファイル（MS Word 形式）を用いて作成してください。テンプレートファイルは、大会ウェブサイト https://sites.google.com/view/sssb54symposium/からダウンロードできます。
- 参加申し込みの際に表示された URL からファイルをアップロードしてください。

● ポスター発表について

- LINC Biz のチャンネルが発表ブースとなります。LINC Biz にポスターを画像形式でアップロードし、チャットおよびビデオ会議で質疑応答を行うことができます。ポスターのダウンロードは出来ませんが、スクリーンショットを撮影される危険性は排除できません。なお、オンサイト初日（12 月 3 日）の 9:00 より、発表内容を PDF スライド 1 枚にまとめて 30 秒で紹介する「フラッシュトーク」の時間を設けます。またポスター賞受賞者の方には、フラッシュトークではなく 15 分の発表を行っていただきます。11 月 30 日（水）までにフラッシュトーク用 PDF スライドをご準備ください。後日、PDF ファイルのアップロード先をお知らせします。

● 要旨集について

- 今年度は冊子体の要旨集を発行しません。参加者には、電子媒体の要旨集がダウンロードできる URL をご連絡します。

● 第 54 回種生物学シンポジウム実行委員会

奥山雄大（国立科学博物館）
問い合わせ先：sssb2022tsukuba at gmail.com（at を@に置き換えて下さい）

# 第 53 回 種生物学シンポジウム（東北）の記録
# 2021 年 12 月 3 日（金）～ 5 日（日）オンライン

**片岡奨励賞受賞講演会**

本庄三恵（京都大・生態学研究センター）ウイルス生態学：水域から陸域へ

柿嶋聡（国立科学博物館・分子生物多様性研究資料センター）特異な生活史戦略に着目した植物の多様性メカニズムに関する研究

**実行委員会企画ミニシンポジウム「植物保全ゲノミクスの最前線」**

企画者：陶山佳久（東北大学）・井鷺裕司（京都大学）

陶山佳久（東北大学）・井鷺裕司（京都大学）希少種保全に応用できるゲノム解析技術とその適用プロジェクトの概要

牧野能士（東北大学）RNAseq 解析による希少植物のゲノム診断

井鷺裕司（京都大学）ゲノム情報に基づくテーラメイド生物多様性保全

総合討論

**和文誌編集委員会企画シンポジウム「過去、現在、未来をつなぐ博物館標本－Museomics から挑む生物多様性研究のブレイクスルー」**

企画者：企画者：中濱直之（兵庫県立大学）・岩崎貴也（お茶の水女子大学）・中臺亮介（国立環境研究所）・大西亘（神奈川県立生命の星・地球博物館）

中濱直之（兵庫県立大学）趣旨説明

伊藤元己（東京大学）生物標本の学術的、社会的価値

大西亘（神奈川県立生命の星・地球博物館）標本 × 学術情報の流通ハブとしての博物館

仲里猛留（情報・システム研究機構）Museomics：標本データと配列データの連携への挑戦

志賀隆（新潟大学）博物館標本は地域の自然のシードバンクとなり得るか

岸田拓士（ふじのくにミュージアム）標本のゲノムが物語ること：博物館におけるゲノム研究」

遠山弘法（国立環境研究所）東南アジア植物の多様性研究における DNA バーコーディング

表渓太（北海道博物館）鳥類の剥製標本を用いた保全遺伝学的研究

長太伸章（国立科学博物館）昆虫標本からのミトコンドリアゲノムの構築

コメンテーター：中臺亮介（国立環境研究所）・首藤光太郎（北海道大学）・岸本圭子（新潟大学）

総合討論

**ポスター発表**

田路翼（信州大・理）・廣田峻（東北大・農）・石本夏海（信州大・理）・中瀬悠太（信州大・理）・江川信（信州大・理）・中村駿介（信州大・理）・服部充（長崎大・環境）・陶山佳久（東北大・農）・市野隆雄（信州大・理）送粉者サイズに応じた花サイズの山域間独立進化: 4 種における実証

磯田珠奈子（京大・理）・小山時隆（京大・理）ウキクサ植物の個体間花成誘導制御機構の解析

石井直浩（横国大・環境）・内田圭（東京大・農）・山本哲史（農研機構）・岩知道優樹（横国大・環境）ラン科植物マヤランの遺伝的多様性に対する都市化の影響

長谷川佳代・川窪伸光（岐阜大・院・自然科学技術）つる植物の自己認識　−茎先端の自己絡みの程度の解析−

菅原早紀・川窪伸光（岐阜大院・自然科学技術）淡水性カメ類による種子散布距離の推定

寺田昂平（筑波大・生物学学位プログラム）・大橋一晴（筑波大・生命環境）持ち運ぶ花粉の種組成から見た送粉者としての訪花昆虫の評価

山口真利枝（筑波大・院・生物学）・大橋一晴（筑波大・生命環境）出る杭は打たれる？柱頭の突出度が異種花粉の受け取りやすさに及ぼす影響

杉本健介（日大院・総合基礎）・成塚汐璃（日大・文理）・小泉敬彦（理研 BRC）・松尾歩・陶山佳久（東北大・農）・井上みずき（日大・文理）乗鞍岳パッチ状ハイマツ群落のクローン構造

高添清登（熊本大・院・自然科学）・松尾歩（東北大・院・農）・朴宰弘（慶北大・自然科学）・陶山佳久（東北大・院・農）・王思琪（東北林業大）・副島顕子（熊本大・院・先端科学）倍数性複合体シロヨメナ群の成立過程の解明　～二倍体レベルにおける遺伝的分化の解析～

前田恵未・西脇亜也（宮崎大・農）キレンゲショウマの個体群サイズの違いに伴う結実量の変化

川崎七海（神奈川大・院・理、お茶の水大・ヒューマンライフイノベーション研究所）、中臺亮介（国立環境研究所）、大西亘（神奈川県博）、西田佐知子（名古屋大・博）、山本薫（横須賀市博）、岩元明敏（神奈川大・院・理）、加藤美砂子（お茶の水大・理、お茶の水大・ヒューマンライフイノベーション研究所）、岩崎貴也（お茶の水大・理）神奈川県のキク科植物を対象にした植物の共起非共起パターンの解析：生物間相互作用が与える影響

宮本佳奈（横国大・教育）・山本将也（兵庫教育大・院）・倉田薫子（横国大・教育）絶滅危惧植物チチブイワザクラの人工授粉における血縁度と結実率の関係

宮本通・望月昂・川北篤（東大・理・植物園）タコノキ科アダンにおける花序で繁殖するケシキスイによる送粉

堤美里・望月昂・川北篤（東大・理・植物園）日本産ゴマノハグサ属 5 種における狩りバチの送粉への貢献

塚原一颯（岐阜大・院・連農）・土田浩治・川窪伸光（岐阜大・応生）ノアザミ頭花内に見られるアザミウマ類

大野美涼（岩手大・連農）・山尾僚（弘前大・農生）林冠木の葉形質を決める要因の探索―ササは林冠木にも影響するのか？―

芳賀奨平・大原雅（北大・院・環境科学）一回繁殖型多年生草本オオウバユリにおける開花臨界サイズと個体成長量の集団間比較

辻本隆太郎・大原雅（北大・院・環境科学）ムカゴイラクサの弾発型花粉散布による種子形成とムカゴ形成の役割

松窪祐介・大原雅（北大・院・環境科学）一回繁殖型多年生草本オオウバユリの開花当年葉の役割

芳崎優華（北大・院・環境科学）・牧野海斗（北大・理学部）・塩尻かおり（龍大・農）・高橋空・大原雅（北大・院・環境科学） 雌雄異株植物コウライテンナンショウ（*Arisaema peninsulae*）の 送粉者の訪花に寄与する誘引物質の雌雄間比較

栗原桃香・櫻井裕介・石崎智美（新潟大・院・自然科学）ヨモギ属における揮発性物質を介した個体内及び個体間の情報伝達

佐久間夕芽（山形大院・理工）・富松裕（山形大・理）森林内の局所的な環境勾配に沿って生育する林床植物の細根形質

増田佳奈（神戸大学）・邑上夏菜（神戸大学）・勝原光希（岡山大学）・宮崎祐子（岡山大学）・丑丸敦史（神戸大学）送粉環境に適応したツユクサの花形質

村上渚（神戸大・国人）・矢井田友暉（神戸大・人間発達環境）・宇治田京子（神戸大・国人）・大谷素司（神戸大・国人）・丑丸敦史（神戸大・人間発達環境）鳥媒花における花弁の足場としての利用

夫婦石千尋（九州大学・システム生命科学府）・今井亮介（九州大学・理学研究院）・矢原徹一（九州オープンユニバーシティ）・佐竹暁子（九州大学・理学研究院）ブナ科コナラ属の各種形質における祖先形質推定

古澤知佳（愛教大・生物）・富田峻輔（愛教大・生物）・柿嶋聡（科博・分セ）・芹沢俊介（愛知みどりの会）・常木静河（愛教大・生物）ツユクサのつぼみ受粉の意義

野宮陸・山尾僚 （弘前大・農）アメリカネナシカズラの寄生に対する宿主植物種間の連合効果

島田真彦（石川県立大・環境）・末永海人（石川県立大・環境）・北村俊平（石川県立大・環境）多年生草本サイハイランへのトラマルハナバチの訪花頻度の年変動

工藤葵（京都大・農）・杉原優（京都大・農）・太田敦士（京都大・農）・寺内良平（京都大・農、岩手生工研）直立するオスと下垂するメス：雌雄異株植物オニドコロの花序角度に種子食者が及ぼす影響

大槻あずみ（岐阜大・院・自然科学技術） ニホンジカの糞による種子散布を探る

伊藤嵩将・渡部俊太郎（鹿児島大学・理）局所的な範囲内で共存する複数の近縁種間の分布パターンとその形成要因

橋本和真（学芸大・生物）・星野佑介（学芸大・院・連合）・菅原敬（科博・植物）・堂囿いくみ（学芸大・院・環境科学）スイカズラの昼夜間の送粉者相及び種子生産に対する都市化の影響

鈴木虎太郎・坂田ゆず（秋田県立大・生資）シカの採食を介して近隣植物が植物の被食率に影響するメカニズム -シカの採餌行動と植物の栄養形質のつながりに着目して-

岩井 耀士（新潟大・院・自然科学）・石崎 智美（新潟大・自然科学）草本植物におけるアリ草本植物の可能性

永光輝義（森林総研）標高による季節性のずれと花粉と種子の垂直散布がもたらすサクラ交雑帯の維持機構

大野ゆかり（東北大・生命科学）写真を用いた市民参加型調査「花まるマルハナバチ国勢調査」データ公開

今村航平（茨城大学）・高野（竹中）宏平（長野県環境保全研究所）・吉田友美（福井工業大学）・中静透（森林研究・整備機構）・馬奈木俊介（九州大学）日本の高山植物の保全に対する支払意思額と情報の効果

小林知里（森林総研）枯れ葉マスカレード：擬態モデルの枯れ葉を創出する枯れ葉色の蝶類幼虫の行動生態

樋口裕美子（東大・理・植物園）日本産オトシブミ科昆虫の寄主植物と植物加工方法の関係

髙田蘭子（岐阜大・教育）・三宅崇（岐阜大・教育）・中山晴夏（新潟大院・自然科学）・三宅恵子（名古屋大）・崎尾均（新潟大・農）マタタビは送粉者を騙しているか？窒素資源配分からみた雌雄異株植物マタタビ雌花の偽花粉

石濱史子（国環研）・Kim Jiyoon（Kunsan National University ）・ 小出大（国環研）・赤坂宗光（東京農工大）・田金秀一郎（鹿児島大学）・小川みふゆ（東京大学）・西廣淳（国環研）太陽光発電導入促進が絶滅危惧植物に及ぼす影響の評価

村中智明（鹿児島大・農）早稲・晩稲水田におけるアオウキクサ開花フェノロジー

船本大智（東京大・理）訪花者としての小型甲虫類：ヒゲボソケシキスイ科の事例

松本哲也 （岡山大・院・環境生命）・小林禧樹 （兵庫県植物誌研究会）・末吉昌宏 （森林総研）・宮崎祐子・廣部 宗 （岡山大・院・環境生命） 混生するテンナンショウ属 2 種の繁殖様式と開花・性転換閾値の比較

野村康之（龍谷大・食農研）・那須田周平（京都大・農）・清水健太郎（UZH, Dept. Evol. Biol. Envir. Studies; 横浜市立大・木原研）・永野惇（龍谷大・農; 慶応大・IAB）Direct RT buffer を用いたコムギ NAM 集団の実生および葉のトランスクリプトーム解析

本庄三恵（京都大・生態研）、西尾治幾（滋賀大・DS セ）、村中智明（鹿児島大・農学部）、工藤洋（京都大・生態研）自然条件下でのカブモザイクウイルスの感染によるハクサンハタザオの死亡と遺伝子発現の関係

角田智詞（福井県立大・生物資源）餌へのプロテイン付加がアカマダラハナムグリ幼虫の成長と成虫のサイズに与える影響

西尾治幾（滋賀大・DS セ）、伊藤佑（IST Austria）、村中智明（鹿児島大・農）、本庄三恵、工藤洋（京都大・生態研）フィールド環境下におけるエピジェネティック修飾の機能

倉田正観（東京大・院・総合文化）・阪口翔太（京都大・院・人環）・廣田峻（東北大・農）・倉島治（科博）・陶山佳久（東北大・農）・西田佐知子（名古屋大・博物館）・伊藤元己（東京大・院・総合文化）中部山岳における広義エゾフウロの refugia within refugium は複数回移入によって形成された

今井亮介（九州大・理），佐々木江理子（九州大・理），笠原雅弘（東京大・理），藤野健（東京大・理），谷尚樹（JIRCAS），佐竹暁子（九州大・理）*Shorea laevis* の体細胞突然変異について

柿嶋聡（科博・分子セ）、末吉昌宏（森林総研）、奥山雄大（科博・植物園）タマノカンアオイとタイリンアオイはキノコ擬態花か？―送粉者の共通性と花香成分の違い―

工藤洋・杉阪次郎・本庄三恵 （京都大・生態研）ハクサンハタザオの４年間毎週トランスクリプトームからわかる自然条件下での遺伝子発現の特徴

**ポスター賞受賞者**

**＜種生物学会ポスター賞＞**

磯田珠奈子（京大・理）
宮本通（東大・理・植物園）
鈴木虎太郎（秋田県立大・生資）

**＜河野昭一ポスター賞 ※＞**

菅原早紀（岐阜大院・自然科学技術）

※ 筆頭発表者を学部学生と大学院生（修士）に限定した奨励的ポスター賞です。

# 役員選挙の開票結果

2021 年 11 月 5 日に投票を締め切り、11 月 10 日に岐阜大学において開票を行った結果、下記の役員が選出されました。

種生物学会選挙管理委員会
川窪　伸光・三宅　崇・岡本　朋子

総投票数 91 票（投票率 28.3%）
（　）内は得票数を表し、地区幹事選挙では次点の方までを示しました。選挙に関する規則により、会長、副会長、地区幹事選挙ともに、得票が同数の場合は年少者が優先されます。

1. 会長　（任期 2022 年 1 月～2024 年 12 月）
　選出：西脇　亜也（89）
　その他（0）

2. 副会長　（任期 2022 年 1 月～2024 年 12 月）
　選出：工藤洋（42）
　次点：奥山雄大（24）布施静香（23）

3. 地区幹事　（任期 2022 年 1 月～2024 年 12 月）

北海道・東北地区（定員 3 名）
　選出：坂田ゆず（13），山尾僚（11），陶山佳久（6）
　次点：鈴木まほろ（4）

関東地区（定員 4 名）
　選出：堂囿いくみ（12），新田梢（8），岩崎　貴也（8），大西亘（6）
　次点：細将貴（6）

中部地区（定員 2 名）
　選出：三宅崇（4），常木静河（3）
　次点：吉岡俊人（3）

近畿地区（定員 3 名）
　選出：布施静香（7），井鷺裕司（6），中浜直之（3）
　次点：荒木希和子（3）

中国・四国・九州・沖縄地区（定員 2 名）
　選出：久米篤（4），満行知花（3）
　次点：渡邊謙太（3）

# 事務局からのお知らせ

**2021 年度で片岡基金は廃止しました**――これまで、片岡基金を学会賞副賞の原資として活用してきましたが、残額が少なくなったため、2022 年度より片岡基金の全額を一般会計に繰入れることを幹事会において決定しました。関連して、「片岡基金に関する規則」を廃止したほか、会則第 13 条ならびに「学会賞に関する規則」のうち、片岡基金に関する記述を削除しました。

**電子メールアドレス更新のお願い**――種生物学会では、さまざまな情報を電子メールで配信しています。メッセージが届かない方は、電子メールアドレスが登録・更新されておりませんので、事務局までご連絡ください。（庶務幹事　水口　亜樹）

事務局の連絡先は office@speciesbiology.org です

# 会計報告

**種生物学会　2021年度　決算**　　期間：2021年1月1日～12月31日

| 収入の部 | 2021年予算額 | 決算額 |
|---|---|---|
| 国内会員会費 | 1,600,000 | 1,941,000 |
| 購読料 | 20,000 | 0 |
| 著作権料 | 100,000 | 23,330 |
| その他 | 20,000 | 14 |
| 小　計 | 1,740,000 | 1,964,344 |
| 前年度繰越金 | 9,400,242 | 9,400,242 |
| 合　計 | **11,140,242** | **11,364,586** |

| 支出の部 | 予算額 | 決算額 |
|---|---|---|
| 印刷費　Newsletter | 30,000 | 0 |
| 出版費 | 3,000,000 | 891,000 |
| PSB　2021年 Vol.36 (1-4) | 0 | 0 |
| 和文誌40・41合併号<br>和文誌42号 | 3,000,000 | 891,000 |
| 事務費 | 300,000 | 268,585 |
| 発送費 | 150,000 | 161,510 |
| 冊子発送作業費 | 100,000 | 19,000 |
| その他 | 50,000 | 88,075 |
| ウェブサイト維持管理費 | 410,000 | 451,000 |
| 和文誌編集補助 | 20,000 | 0 |
| 英文誌編集補助 | 20,000 | 20,000 |
| シンポジウム補助金 | 300,000 | 116,160 |
| 交通費 | 50,000 | 0 |
| 学会賞 | 20,000 | 0 |
| 学会選挙費用 | 50,000 | 49,948 |
| 自然史学会連合分担金 | 20,000 | 20,000 |
| 日本分類学会連合分担金 | 10,000 | 10,000 |
| 男女共同参画連絡会分担金 | 10,000 | 10,000 |
| 予備費 | 20,000 | 0 |
| 小　計 | 4,260,000 | 1,836,693 |
| 次期繰越金 | 6,880,242 | 9,527,893 |
| 合　計 | | |

**種生物学会　2022年　予算**　　期間：2022年1月1日～12月31日

| 収入の部 | 2022年予算額 |
|---|---|
| 国内会員会費 | 1,600,000 |
| 購読料 | 0 |
| 片岡基金繰り入れ | 219,015 |
| 著作権料 | 100,000 |
| その他 | 20,000 |
| 小　計 | 1,919,015 |
| 前年度繰越金 | 9,527,893 |
| 合　計 | **11,446,908** |

| 支出の部 | 2022年予算額 |
|---|---|
| 印刷費　Newsletter | 0 |
| 出版費 | 2,000,000 |
| PSB　2022年 Vol.37 (1-4) | 0 |
| 和文誌42号<br>和文誌43号 | 2,000,000 |
| 事務費 | 300,000 |
| 発送費 | 150,000 |
| 冊子発送作業費 | 100,000 |
| その他 | 50,000 |
| ウェブサイト維持管理費 | 66,000 |
| 和文誌編集補助 | 0 |
| 英文誌編集補助 | 0 |
| シンポジウム補助金 | 300,000 |
| 片岡奨励賞副賞 | 100,000 |
| PSB論文賞副賞・郵送料 | 30,000 |
| 交通費 | 70,000 |
| 学会賞 | 0 |
| 学会選挙費用 | 0 |
| 自然史学会連合分担金 | 20,000 |
| 日本分類学会連合分担金 | 10,000 |
| 男女共同参画連絡会分担金 | 10,000 |
| 予備費 | 20,000 |
| 小　計 | 2,926,000 |
| 次期繰越金 | 8,520,908 |
| 合　計 | **11,446,908** |

**2021年度片岡基金決算報告**
期間：2021年1月1日～12月31日

| 収入の部 | 収入額 |
|---|---|
| 利息 | 3 |
| 前年度繰越金 | 349,782 |
| 合計 | 349,785 |

| 支出の部 | 支出額 |
|---|---|
| PSB論文賞副賞（盾） | 23,100 |
| 片岡奨励賞副賞 | 100,000 |
| 郵送料 | 7,285 |
| 振込手数料□ | 385 |
| 次年度繰越金 | 219,015 |
| 合計 | 349,785 |

**会員数**
（2022年10月2日現在）

| | |
|---|---|
| 個人会員 | 325 |
| 一般会員 | 265 |
| 学生会員 | 60 |

（会計幹事　下野　嘉子）

種生物学会ニュースレター 第 55 号

発　行　種生物学会
http://www.speciesbiology.org/

編　集　水口　亜樹（庶務幹事）
〒910-4103　福井県あわら市二面 88-1
福井県立大学あわらキャンパス内 種生物学会事務局

発行日　2022 年 10 月 3 日